

日本認知言語学会論文集

第8巻

Proceedings of the Eighth Annual Meeting of
the Japanese Cognitive Linguistics Association

Vol. 8

JCLA
2008

目次

研究発表

コーパスを利用した動物メタファーの分析	歳岡冨香	1
身体部位「口」の意味拡張：日本語とタイ語の比較を中心に 拡張(extending)と精密化(elaborating)	ラダポーン・サイソンプーン	12
—日本語詩分析への認知意味論的アプローチ—	村田拓也	23
文芸批評に見られる認知言語学的特徴 —小林秀雄を例に—	守屋三千代・高山京子	33
The Interactional Functions of 'Think'/'Feel' Verbs in Chinese Conversation	遠藤智子	44
決定木を用いた多義語分析：多義動詞「出る」を例に 「あがる」と「のぼる」、及び「おりる」「さがる」「くだる」 「おちる」の意味分析	李在鎬・伊藤健人	55
動詞の周辺意味構造の果たす役割について： <i>open</i> と「あける」の比較語彙意味研究	太田真由美	66
Middle and Tough Constructions in Web Advertising	植田正暢	75
複合動詞の構文的意味拡張に関する一考察	坂本真樹	86
メトニミーとしてのタガログ語「主要部無し関係節」	野田大志	97
介在性表現の分析 —非自立型メトニミーとして—	長屋尚典	108
いわゆる与格主語述語の認知言語学考察：用法基盤アプローチからの分析	山本幸一	116
現代日本語における格の体系化と分節機能	増田恭子	127
通過を表す動詞passと前置詞句	菅井三実	137
帰結節を伴わないif節の発話機能：その解釈スキーマと語用論的変数	出水孝典	148
OEDを使った英語オノマトペの数量分析：動詞を中心に	横森大輔	159
包括的格理論をめざして：分裂型格システム/三立型格システムを中心に	菅原崇	170
百科事典的知識に対する構成原則の提案	中村渉	181
—日本語名詞句の特定・不特定分析への応用を例として—	山口慶太	192
概念のインスタンス化と特異クラスについて	長谷部陽一郎	201
トートロジーと主観性について	阿部宏	212
同語反復表現「XといえばX」におけるカテゴリー化について	野呂健一	223
「どっこいしょ」はどのような認知カテゴリーか	有働真理子・高野美由紀	234
「間投詞」を認知語用論的に捉えなおす	宮浦国江	245
形容詞の多義性：共感覚比喩の意味ネットワーク	高田麻里	256
分解不可能な慣用表現の慣用的意味の成立		
—<身体の状態(の変化)>から<精神状態(の変化)>への意味拡張—	有菌智美	263
感情のメタファーの日英差をもたらす要因についての考察	大石亨	274
感情が形づくる心の風景		
—"a flood of joy"型メタファー表現に見る写像の特性—	大森文子	285

日本語教科書に見る事態把握の傾向			
—中国で出版された教科書を例として	近藤安月子・姫野伴子	296	
ヴォイスの側面から見た感情表現の認知構造			
—日中両言語における感情の自発性の捉え方を対照して—	王安	307	
語彙獲得における動詞の使い分けに関する研究：中国語の「持つ」系			
動詞を事例として	佐治伸郎・今井むつみ・Henrik Saalbach	318	
日本語を第二言語とする幼児のスキーマ生成による文構造の構築プロセス			
—使用依拠モデルの観点から助詞の使用に焦点を当てて—	橋本ゆかり	328	
"They could have done it tomorrow": 未来の反実仮想	片岡宏仁	338	
行為解説の進行形概念構造について	友澤宏隆	347	
A Frame-based Analysis of Double Object Construction			
—With Special Reference to CHARGE/COST/SAVE Events—	年岡智見	357	
Systematicity in English Ditransitive Idioms	渋谷良方・野澤元	368	
構文文法に基づく日本語構文の体系的記述の試み	永田由香	377	
新しい表現の出現とその特性について			
—「形容詞+ソウスギル」を中心に—	奥田芳和	388	
所有表現の名詞化における容認性逆転現象			
—「ある」型から「持ち」型への転移—	川島嘉美	397	
「認知言語類型論」その可能性の中心：言語の多様性を創発する			
認知Aモードから認知Dモードへの変容と変遷	中野研一郎	406	
A Positional Effect in Sound Symbolism: An Experimental Study			
	川原繁人・篠原和子・内本有美	417	
音象徴語の「範疇化問題」への一つの答え：			
田守・スコウラップ(1999)へのリプライ	秋田喜美	428	
<i>This, that and it</i> from a Cognitive Perspective	新村朋美・ハヤシ・ブレンダ	439	
否定の認知の身体的基盤についての、言語表現と身振り・表情の			
共起実験による研究	竹内義晴・宮下博幸	450	
日本語の補助動詞「テシマウ」に対応する韓国語のa pelitaとko maltaについて			
—文法化の観点からの対照分析—	鄭世桓・上原聡	461	
文法化現象(Grammaticalization)への批判・反例について			
—文法化研究の正当性の再検討	山口和之	472	
マッチングとトートロジーの伝達情報	酒井智宏	483	
Toward a Cognitive Theory of Contextual Reference	安原和也	494	

特別講演

Constructional Emergence from the Perspective of Grammaticalization:			
The Case of Pseudo-Clefts	Elizabeth Closs Traugott	505	

シンポジウム

認知言語学とコミュニケーション	司会：平賀正子	521
活動としての認知、情動、言説：活動理論とコミュニケーション	茂呂雄二	522
行為連鎖のなかの言語使用 超音波検査における指し示しの実践—	西阪仰	532
コンテキスト化の認知プロセス	井上逸兵	545
詩的言語への認知的アプローチ：俳句の分析を通して	平賀正子	557

ワークショップ

Semantic-Pragmatic Changes in Grammar and Lexicon:		
Emergence of Concessivity, Politeness Effect, and Speaker's Subjective Evaluation	司会：堀江薫	569
Concessive Meaning Associated with Quotative Forms in Japanese	鈴木亮子	570
Politeness Effect Invoked in Communities: European T-V Distinction and Japanese Honorifics	小野寺典子	574
Semantic Extension of Sensory Adjectives in English and Japanese:		
From Perception to Modality	進藤三佳	578
Grammaticalization, Dialogicity, and Evidentiality: Comments on Papers in the Workshop on Semantic-Pragmatic Changes in Grammar and Lexicon	Elizabeth Closs Traugott	582
早期英語教育：「ことば」の構造だけでなく学習者が「ことば」をどう捉えるかに注目した		
英語学習指導法に向けて	代表：小野尚美	587
Whole Languageアプローチによる小学校英語の指導方法と問題点	小野尚美・高野恵美子	588
公立小学校におけるリテラシー教育	アレン玉井光江	591
第二言語としての日本語の多義語の習得と日本語教育への応用		
代表：森山新		595
第二言語としての日本語の格助詞の意味構造と習得		
—日本語教育に生かすために—	森山新	596
言い切りの「た」の多義性とその習得：韓国語・中国語を母語とする学習者の場合	石井佐智子	600
複合動詞「～出す」の習得 —韓国語を母語とする学習者を中心に—	白以然	604
中国語を母語とする日本語学習者の「きっと」と「必ず」の意味知識	王冲	607
モダリティの文法化・意味変化とその方向性		
代表：黒滝真理子		611
タイ語の動詞 <i>toy</i> の歴史的意味変化：義務モーダルの		
文法化・多機能化に関する事例研究	高橋清子	612
日英語の可能表現の意味変化とその方向性	黒滝真理子	616
ドイツ語のような言語ではなぜ認識的意味への意味変化が生じるのか	宮下博幸	620
中国語母語話者の認知過程から見る中国語のモーダルマーカの		
意味変化の考察：第2言語習得データを基に	玉地瑞穂	624
モダリティ表現の意味変化と主観化	ハイコ・ナロック	628

構文を意味地図で捉える	代表：中村芳久	632
構文のネットワーク表示と意味地図表示：		
Evolutionary pathの提案	中村芳久	633
言語知識を構成する「構文」の特性と分布について		
—構文理論と意味地図モデル—	村尾治彦	637
自動詞様態移動構文に関する通言語的考察：意味地図の観点から	田村幸誠	641
Multifunctionality of the Key Construction in Korean:		
In Terms of Cognition, Typology, and History	金容澤	645
文法と語用論の関系の新しい側面	代表：高橋英光	649
Preferred Argument Structure in English Imperatives	高橋英光	650
Phatic Interjections in English: Grammaticalization and		
Discourse Marker/Speech Act Uses	ペトリシェヴァ・ニーナ	654
Pragmatic Factors in Grammaticalization: The Case of Intensifiers	大橋浩	658

マッチングとトートロジーの伝達情報

酒井 智宏

(日本学術振興会特別研究員)

1. 目的

トートロジー「XはXだ」はしばしば譲歩節と共起する(大久保 2000)。

- (1) ねずみを取らなくても猫は猫だ。

一般に、譲歩節を伴うトートロジー「PでもXはXだ」は少なくとも次の三種類の情報を伝達する。

- (2) a. 伝達情報 1: 属性 P を持つ X も X として扱われるべきだ。(特定の X の処遇)
b. 伝達情報 2: 特定の X が属性 $\neg P$ を持つ必要はない。(特定の X のあるべき姿)
c. 伝達情報 3: 属性 $P/\neg P$ は X の定義に含まれるべきではない。
(カテゴリー X の定義)

(1)では「X = 猫」「P = ねずみを取らない」「 $\neg P$ = ねずみを取る」であり、(2)は(3)に対応する。

- (3) a. 伝達情報 1: (うちの猫である)タマを捨てる必要はない。
b. 伝達情報 2: タマはねずみを取る必要はない。
c. 伝達情報 3: 猫がねずみを取るかどうかは重要でない。

坂原 (1992, 2002)は、(1)のようなトートロジーは意味論レベルで「すべての X は X だ」という恒真命題を表し、そこからカテゴリー X のメンバーの等質性を強調するという語用論的な機能が生じると考えている。この考え方によると、(2a-c)はメンバー間の等質性の強調というトートロジー固有の機能によって含意されることになる。すべての X が等質的である以上、属性 P の有無によって X を区別することは許されず(= 2a)、したがって属性 $P/\neg P$ の有無は X の定義にとって重要ではなく(= 2c)、特定の X が $\neg P$ を持つ必要はない(= 2b)。

また、大久保 (2000)は、(1)のトートロジーは(2a-3a)のような結論を正当化する機能によって定義され、この点で、(1)は(3a)と逆の結論(4b)を正当化する矛盾文(4a)と対照的な関係にあると述べている。

- (4) a. ねずみを取らない猫は猫ではない。
b. (ねずみを取らない)タマは捨てられるべきだ。

この論文では、これらの先行研究の主張に反し、(2a-c)の伝達情報はトートロジー自

体の定義から導かれるのではなく、「XはXだ」が文脈との相互作用によって構築する差異否定型トートロジーの解釈スキーマ(酒井 2006)と譲歩文が構築する解釈スキーマとの相互作用により、派生的に導き出されることを論じる¹。第2節では、譲歩文「Pでも¬Q」の解釈スキーマを提示し、その伝達情報を導き出す。第3節では、差異否定型トートロジー「XはXだ」の解釈スキーマを提示し、これを第2節で提示した譲歩節の解釈スキーマと合成する。第4節では、譲歩節を伴うトートロジー「PでもXはXだ」が譲歩文「Pでも¬Q」の一種であり、かつ差異否定型トートロジー「XはXだ」の一種であるという観点から、(2)の伝達情報を導き出す。

2. 譲歩文の解釈

2.1 譲歩文の伝達情報

一般に、譲歩文「Pでも¬Q」は文脈に応じて少なくとも次の三種類の情報を伝達することができる(酒井 2005)²。

- (5) a. 伝達情報 1 = ¬Q が正当化する結論
- b. 伝達情報 2 = 「Pの成否は任意である」という内容の命題
- c. 伝達情報 3 = 「Pでも¬Q」の原因命題

例えば、譲歩文(6)は文脈に応じて少なくとも(7)のような情報を伝達することができる。

- (6) 牛乳を飲んでも気分が悪くならない。
- (7) a. 伝達情報 1 = 今日は出かけられる。
- b. 伝達情報 2 = 牛乳を飲むか飲まないかは自由である。
- c. 伝達情報 3 = 牛乳アレルギーではない。

(7a-c)が伝達されるのはそれぞれ(8-10)のような場合である。

- (8) A: これから出かけるのに、そんなに牛乳飲んで大丈夫?
 B: 牛乳を飲んだって気分が悪くなったりはしないよ。
- (9) A: 牛乳飲んだら気分悪くなるから飲んではいけませんよ。
 B: そんなことないよ。飲んでも気分が悪くなったりはしないよ。
- (10) A: 君、牛乳アレルギー?
 B: えっと、牛乳を飲んでも気分が悪くなるようなことはないなあ。

次節で見るように、これらの伝達情報はいずれも譲歩文固有の意味ではなく、譲歩文の解釈スキーマから推論により導き出すことができる。

2.2 譲歩文の解釈スキーマ

前節で見た譲歩文の伝達情報は、メンタル・スペース理論 (Fauconnier 1985)おけるマッチング概念(Fauconnier 1997)に基づく次のスキーマから導出される(酒井 2005)。

(11)

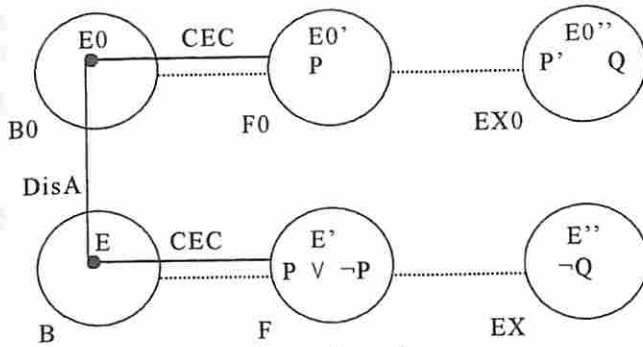


Figure1: 「P でも¬Q」

B0: 反事実的基底スペース、F0: 反事実的基礎スペース、EX0: 反事実的拡張スペース

B: 事実に基底スペース、F: 事実に基礎スペース、EX: 事実に拡張スペース

E0: 命題集合、E: 命題集合、CEC: 因果コネクター (Fauconnier & Turner 2002)

DisA: 差異コネクター、DisA(E0) = E: E0 と E には互いに両立不可能な命題が含まれる

CEC(E0) = F0-EX0 (i.e. E0 は F0-EX0 の原因)、CEC(E) = F-EX (i.e. E は EX の原因)

IC(E0)=E0', IC(E0')=E0'', IC(E)=E', IC(E')=E'', IC(P)=P' (i.e. E0 = E0' = E0'', E = E' = E'', P = P')

F0、EX0 はそれぞれスペース B0 に対する基礎スペース、拡張スペースであり、F、EX はそれぞれスペース B に対する基礎スペース、拡張スペースである。F0 には「P でも¬Q」における P が書き込まれ、EX0 には Q が書き込まれる。F には P ∨ ¬P が書き込まれ、EX には¬Q が書き込まれる³。メンタル・スペース理論では一般に次のマッチング操作が仮定されている⁴。

(12) マッチング操作: 基礎スペースの構造とマッチする任意のスペースに拡張スペースの情報を投射せよ。

基礎スペースとマッチし、拡張スペースの情報が投射されるスペースをターゲットスペースと呼ぶ。(12)を(11)のスペース構成に適用すると、次の操作が定義される。

(13) 読歩文におけるマッチング操作: F0/F の構造とマッチする任意のスペースに EX0/EX の情報を投射せよ。

すなわち、F0 の内容が成り立つ状況では EX0 の内容が成り立ち、F の内容が成り立つ状況では EX の内容が成り立つ。B0-F0-EX0 は反事実的状況を表し、B-F-EX は現実の状況を表している。B0 と B の相違は、B0 では命題集合 E0 が成立するのに対して、B では命題集合 E が成立する点である。E0 と E は差異コネクター DisA で結合されており、互いに両立不可能な命題が含まれている。因果コネクター CEC が示すように、E0 は F0-EX0 の原因命題の集合であり、E は F-EX の原因命題の集合であるから、E0-EX0 と F-EX の違いを生み出すのは E0 と E の違いである(cf. 坂原 1985)。すなわち(11)は、仮

に E0 が成り立てば F0-EX0 が成り立つが、実際には(E0 ではなく)E が成り立つので、(F0-EX0 ではなく)F-EX が成り立つ、ということを表している。これは、E が成り立つ以上、Q の成立に P であるか¬P であるかは関係ない、ということである。

2.3 マッチングと譲歩文の伝達情報

2.2 節のスキーマから 2.1 節で提示した譲歩文の解釈を導き出すことができる。

2.3.1 伝達情報 1

(14a-c)が与えられると命題(14d)が導出される。その過程は(15)に示すとおりである⁵。

- (14) a. 牛乳を飲んでも気分が悪くならない。(譲歩文の発話内容)
b. 気分が悪くならなければ、今日は出かけられる。(文脈情報 1)
c. 今日牛乳を飲む。(文脈情報 2)
d. 今日は出かけられる。(結論 = 伝達情報 1)
- (15) a. 発話される譲歩文 : F1: $P \vee \neg P$, $P = \text{「牛乳を飲む」}$
EX1: $\neg Q$ (気分が悪くならない)
b. 文脈情報 1 : F2: $\neg Q$ (気分が悪くならない)
EX2: S (今日出かけられる)⁶
c. 文脈情報 2 : T (「今日」に対応するターゲットスペース) : P (牛乳を飲む)
d. 結論 : (15a)と(15c)から、F1 と T のマッチングにより、 $T : \neg Q$
T : $\neg Q$ と(15b)から、F2 と T のマッチングにより、 $T : S$
ゆえに、今日出かけられる。

すなわち、譲歩文の情報 1 は、二つの文脈情報が与えられたときに、マッチング操作を二度適用することにより得られる情報である。

2.3.2 伝達情報 2

譲歩文の伝達情報 2 は次のようにして導き出される。

- (16) a. 牛乳を飲んでも気分が悪くならない。(譲歩文の発話内容)
b. (今)牛乳を飲むか飲まないかは自由だ。(結論 = 伝達情報 2)
- (17) a. 発話される譲歩文 : F: E' (e.g. 「牛乳アレルギーではない」 $\in E'$)
F: $P \vee \neg P$, $P = \text{「牛乳を飲む」}$
EX: $\neg Q$ (気分が悪くならない)
b. T (例えば「今」に対応するターゲットスペース) : E'
T: E' から、 $T : \neg Q$
T: $\diamond P \wedge \diamond \neg P$
(\diamond は可能性演算子。P でも¬P でも、T の整合性には影響しない。)
ゆえに、今牛乳を飲むかどうかは自由である。

(11)において、E さえ成り立てば、P であろうと¬P であろうと、¬Q が帰結される。そこで、E が成り立つ限り、P であっても¬P であっても結果に差はなく、ゆえに P であ

ってもよいし、 $\neg P$ であってもよい、ということを表すのが譲歩文の伝達情報2である。ここで、一般に $\Diamond \phi \wedge \Diamond \neg \phi$ (=「 ϕ であってもよいし、 $\neg \phi$ であってもよい」) という形の命題は ϕ と $\neg \phi$ のどちらにより労力がかかるかに応じて二通りの形で実現される。

- (18) a. ϕ により労力がかかる。 $\rightarrow \Diamond \neg \phi$
b. $\neg \phi$ により労力がかかる。 $\rightarrow \Diamond \phi$

ϕ により労力がかかる場合の例が(19)であり、 $\neg \phi$ により労力がかかる場合の例が(20)である。

- (19) a. 勉強しても受からない。(P=「勉強する」により労力が伴う。)
b. ゆえに、勉強しなくてもよい。($\Diamond \neg P$)
(20) a. さぼっても叱られない。($\neg P$ =「さぼらない」により労力が伴う。)
b. ゆえに、さぼってもよい。($\Diamond P$)

2.3.3 伝達情報3

一般にある命題からその原因命題を推論することができる。例えば、(21a-22a)から(21b-22b)を推論することができる⁷。このとき、(21a-21a)だけを発話することで、間接的に(21b-22b)が伝達されることがある。

- (21) a. くしゃみが止まらない。[結果]
b. 花粉症だ。[原因]
(22) a. 彼女が私のメールに答えてくれなくなった。[結果]
b. 彼女は私のことが好きではなくなった。[原因]

(11)によると、Eは譲歩文「Pでも $\neg Q$ 」の原因命題集合であるから、「Pでも $\neg Q$ 」はEに含まれる命題を伝達することができるかと予測される。こうして伝達されるのが譲歩文の伝達情報3である。

- (23) a. 牛乳を飲んでも気分が悪くならない。(譲歩文の発話内容)
b. 牛乳アレルギーではない。(譲歩文の原因命題 R ($R \in E$) = 伝達情報3)
(24) a. 彼女は遅く帰っても叱られない。(譲歩文の発話内容)
b. 彼女の親は甘い。 / 彼女は親に見放されている。
(譲歩文の原因命題 R ($R \in E$) = 伝達情報3)

3. トートロジー

3.1 トートロジーの解釈スキーマ

一般にトートロジー「XはXだ」は変化の否定として分析でき、実際に観察される用法の多くは次のスキーマによって包摂される(酒井 2006)。

(25)

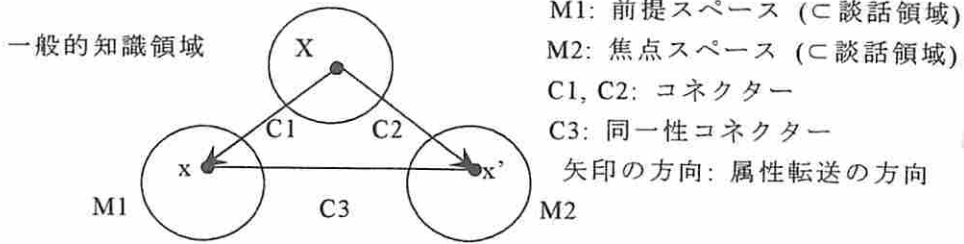


Figure 2: 「X は X だ」

トートロジーは前提スペース M1 に対して焦点スペース M2 を開く。M1 と M2 は異なる二つの状況を表すが、このスキーマ自体はその内容を指定しない。M1 には要素 x がすでに存在し、「 x は X である」という関係が成り立っている。ここで、 X は一般的知識領域の要素である。図中ではこの関係が $C1(x) = X$ で表されている。トートロジーによって新たに開かれる M2 には、 x の対応物 x' が導入され ($C3(x) = x'$)、かつ、「 x' は X である」($C2(x') = X$) という関係が導入される。この関係がトートロジーの断定である。C3 は同一性コネクターであるから、 x と x' は同一個体として解釈される。したがって、「 X は X だ」は状況 M1 で X としての性質を満たす x が、状況 M2 でも X としての性質を満たすことを断定する。

M1 と M2 はスペース変数であり、発話文脈において具体的な値が定まる。それに応じてトートロジーは多様な解釈を持つ。例えば、(26)は(27)の解釈を持つ。

(26) 今日もイチローはイチローだ。

(27) a. M1(普段の状況): $X(x)$ 、 $X = \text{イチロー} [= x(\text{普段のイチロー}) \text{は } X \text{ の属性を持つ}]$
 b. M2(今日の状況): $X(x')$ $[= x'(\text{今日のイチロー}) \text{は } X \text{ の属性を持つ}]$

すなわち、(26)は「今日のイチローも普段のイチローと変わらない」という意味を表す。このほか、M1 と M2 の取る値に応じて、トートロジーは次のような多様な解釈を持つ。

(28) 太郎の絵でも、猫は猫だ。M1: 現 M2: 太郎の絵

(29) (いかにも子供らしい言動を見て)やっぱり子供は子供だ。

M1: 予測スペース、M2: 現実スペース

(30) ひどい人種差別主義者にとってさえ、人間は人間だ⁸。

M1: 現実、M2: 人種差別主義者の信念

3.2 トートロジーと譲歩文の解釈スキーマ

譲歩文の解釈スキーマ(11)の B と EX をそれぞれトートロジーの解釈スキーマ(25)の M1 と M2 を対応させることにより、(11)と(25)を単一化することができる。こうして得られるのが譲歩節を伴うトートロジー「P でも X は X だ」の解釈スキーマ(31)である。

(31)

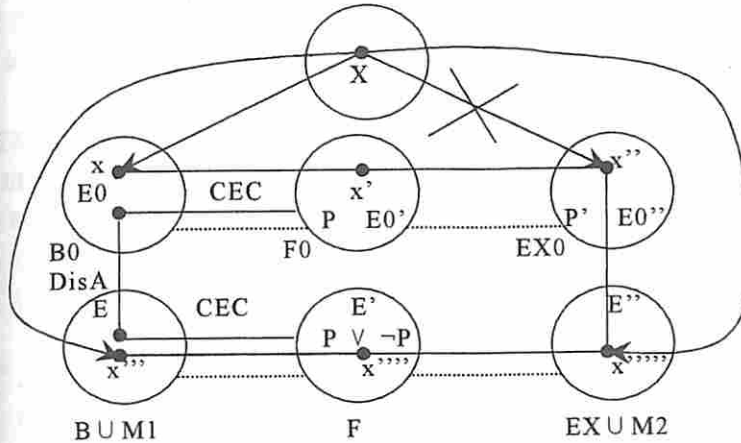


Figure3: 「PでもXはXだ」

これは、トートロジーの解釈スキーマ(25)におけるスペース変数 M1 の値が B であり、M2 の値が EX である場合に過ぎない。(31)ではこれらをそれぞれ BUM1、EXUM2 で表している。(31)は(11)と(25)を単純に合成したものであり、「PでもXはXだ」を意味的に分解不可能な単位(例えば構文)と考える必要はなく、大久保(2000)のようにこれをトートロジーの用法として独立に規定する必要もない。(31)は、仮に E0 が成り立てば、属性 P はある個体を猫のカテゴリーから追い出すのに十分であるが、実際には(E0ではなく)E が成り立つので、属性 P はある個体を猫のカテゴリーから追い出すのに十分ではない、ということを表している。これは、E が成り立つ以上、ある個体が猫であるかを決定するために、P であるか $\neg P$ であるかは関係ない、ということである。

この分析によると、(32 = 1)は(33)のスペース構成を構築する。

- (32) ねずみを取らなくても猫は猫だ。
 (33) a. BUM1: E (命題集合) $\wedge X(x)$ 、 $X =$ 猫
 b. F: $P \vee \neg P$ 、 $P =$ ねずみを取る(x')
 c. EXUM2: $X(x'')$

これは、命題集合 E のもとでは、猫である個体 x に $P =$ 「ねずみを取らない」または $\neg P =$ 「ねずみを取る」という属性を付け加えた個体 x' も猫であるということを表している。

4. 譲歩節を伴うトートロジーの伝達情報

本節では、3.2 節で提示した「PでもXはXだ」のスキーマから、第1節で提示した譲歩節を伴うトートロジーが持つ三種類の解釈を導き出す。

4.1 伝達情報 1

譲歩節を伴うトートロジーの伝達情報(2a-3a)は次のように導き出すことができる。

- (34) a. ねずみを取らなくても猫は猫だ。(譲歩節を伴うトートロジーの発話内容)

- b. (一般に)猫を捨てる必要はない。(文脈情報 1)
- c. タマはねずみを取らない。(文脈情報 2)
- d. タマを捨てる必要はない。(結論 = (3a))
- (35) a. 発話内容: F1: X (x'), X = 猫
 F1: E' (e.g. 「ねずみを取る」は猫の定義に含まれない) ∈ E'
 F1: P (x') ∨ ¬P (x), P = 「ねずみを取らない」
 EX1: X (x''), ただし C (x') = x''
- b. 文脈情報 1: F1: X (x)
 EX1: ◇¬捨てる (x)
- c. 文脈情報 2: T: X (a), X = 猫かつ a = タマ
 T: P (a)
- d. 結論: (35a)と(35c)から、F1 と T のマッチングにより、T: X (a)⁹
 T: X (a)と(35b)から、F1 と T のマッチングにより、
 T: ◇¬捨てる (a)
 ゆえに、タマは捨てる必要はない。

(34d)は、上の(14d)と同様、二つの文脈情報が与えられたときに、マッチング操作を二度適用することにより得られる情報である。

4.2 伝達情報 2

伝達情報(2b-3b)は次のようにして導き出される。

- (36) a. ねずみを取らなくても猫は猫だ。(譲歩節を伴うトートロジーの発話内容)
- b. タマはねずみを取る必要はない。(結論 = (3b))
- (37) a. 発話内容: (35a)と同様。
- b. (37a)からの帰結: F2: X (a), X = 猫かつ a = タマ
 F2: E'
 F2: P (a) ∨ ¬P (a)
 EX2: X (a'), ただし C (a) = a'
- c. T: E'
 T: X (a), X = 猫かつ a = タマ
 T: E' から、T と F2 のマッチングにより、T: X (a)
 T: ◇P (a) ∧ ◇¬P (a) (= タマはねずみを取っても取らなくてもよい。)

(37a)は、(35a)と同様、Eのもとでは、猫である個体 x はねずみを取るか否かにかかわらず猫であると述べている。タマ(=a)も猫であるから a = x でありうる。このとき、Eのもとでは、タマはねずみを取るか否かにかかわらず猫であることになる。これを述べたのが(37b)である。ねずみを取っても取らなくても結果に差がないことから、◇P (a) ∧ ◇¬P (a) (= 「タマはねずみを取ってもよいし、取らなくてもよい」)と結論するのが(37c)である。ここで、P(「ねずみを取らない」)と¬P(「ねずみを取る」)とでは、¬Pの方に

より労力がかかるから、(18)より、最終的には◇P(a)=(「タマはねずみを取らなくてよい」と結論される。これが伝達情報(3b)である。

4.3 伝達情報 3

(33)が示すように、(38a = 32 = 1)は、命題集合 E のもとでは、猫である個体 x に P = 「ねずみを取らない」または $\neg P$ = 「ねずみを取る」という属性を付け加えた個体 x' もやはり猫であるということを表している。ここから、命題集合 E には(38b)と(38c)が含まれていることが分かる。

- (38) a. ねずみを取らなくても猫は猫だ。(譲歩節を伴うトートロジーの発話内容)
b. 猫の定義属性は属性「ねずみを取る」を含まない。
c. 猫の定義属性は属性「ねずみを取らない」を含まない。

(38b-c)が成り立つからこそ、(33)の F-EX が成り立つのである。この(38b-c)が(2c-3c)に相当する。これで(2-3)のすべての伝達情報が導出されたことになる。

5. 結論

譲歩節を伴うトートロジーとは、トートロジーの解釈スキーマと譲歩文の解釈スキーマの双方によって包摂される文である。この観点からすると、(2)の伝達情報は、「P でも X は X だ」が譲歩文「P でも $\neg Q$ 」の一種であり、かつトートロジー「X は X だ」の一種であると考えることにより、構成的に導き出すことができる。したがって、この種の文の意味論を定式化するために特殊なメカニズムを仮定する必要はなく、(2)のような伝達情報をその意味論的定義とするのは誤りである。

本論文で展開したトートロジー分析は、文自体に命題を表示する力はないとするコンテキスト主義(Recanati 2004)の立場ときわめて親和性が高い。本論文の分析では、トートロジー自体はいかなる命題も表示せず、(25)のようなスキーマを構築するための部分的指令を与えるに過ぎない。(25)のスキーマでさえ命題を表示する力はなく、M1、M2、X などに関する文脈情報が与えられてはじめて命題が表示される。こうした情報の一部を提供するのが譲歩節である。この考え方によると、「P でも X は X だ」が表す命題は、譲歩文とトートロジーのスペース構築指令をそれぞれ適用し、それを文脈情報によって拡充した後によりやく得られる。この点で本分析は「X は X だ」が意味論レベルで無意味な命題を表すという考え方(例えば坂原 1992, 2002)と大きく異なる。本分析とコンテキスト主義との関係については機会を改めて詳しく論じる。

注

¹ この論文では、紙面の都合上、坂原 (1992, 2002)と大久保 (2000)の分析が誤っていることを証明することはしない。以下で論じるのは、トートロジー自体が命題に相当する豊かな言語的意味を持つと考えなくとも、問題の伝達情報をすべて導くことができるということである。

² 喜田 (2000)はフランス語の条件文 Si P, Q (「P ならば Q」)が伝達情報(i-iii)を持つことを論じている。

(i) Q が正当化する結論

(ii) Q が望ましいことであれば、「P の成立が望ましい」

Q が望ましくないことであれば、R = 「P の成立は望ましくない」

(iii) 「PならばQ」の要約

喜田はこれらの伝達情報を条件文が固有に持つものであるとし、(i-iii)を条件文の意味の定義に用いているが、この分析は不適切である。(i-iii)の性質は均一ではなく、その性質こそが言語学的説明の対象とされるべきである(Sakai 2006)。(i-iii)の性質は、喜田(2000)とは逆に、条件文の意味から(i-iii)の伝達情報を導き出すことによって説明することができる(酒井 2007)。

³ $P \vee \neg P$ は恒真式であり、実際には何の情報的貢献ももたらさないが、ここでは理解を容易にするため、この恒真式をFに書き込むことにする。

⁴ この操作は命題論理学における肯定式(i-iii)と等価である。

(i) 前提 1: $p \rightarrow q$

(ii) 前提 2: p

(iii) 結論: q

⁵ 以下では、複数の基礎スペースと拡張スペースの組を区別するために、F1-EX1、F2-EX2などと番号をふっている。また、譲歩文の解釈スキーマにおける反事実的スペースであるF0-EX0は省略している。

⁶ 条件文「PならばQ」は一組の基礎スペースと拡張スペースを構築し、基礎スペースにはPが書き込まれ、拡張スペースにはQ(およびP)が書き込まれる。詳細はFauconnier(1997)および酒井(2007)を参照。

⁷ この推論は演繹推論ではないので、結論は一意に決定されない。くしゃみが止まらない原因は実は花粉症ではないかもしれず、メールに回答がない原因は実は嫌われたせいではないかもしれない。

⁸ (30)は次のフランス語のトートロジーに基づいている。

(i) Même pour le raciste de base, un homme est un homme, une femme est une femme.

(http://www.philo5.com/Textes-references/VirilioPaulParano_MagLitteraire444_050800.htm)

⁹ Tは現実の一部であるから、B: Eからの情報転送によりT: Eが成り立つ(ここでEはE'と同一の命題集合)。F1とTがマッチするのはこのためである。また、T: X(a)はもともと成立しているが、マッチングにより同じ命題が上書きされる。これは下の(37c)においても同様である。この一見無意味な上書きはある種の文脈で意味を持つが、これについては機会を改めて論じる。

参考文献

- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces: Aspects of meaning construction in natural language*, MIT Press. 坂原 茂、水光雅則、田窪行則、三藤博(訳)『メンタル・スペース』白水社、1996年。
- Fauconnier, Gilles (1997) *Mappings in thought and language*, Cambridge: Cambridge University Press, 坂原 茂、田窪行則、三藤博(訳)『思考と言語におけるマッピング』岩波書店、2000年。
- Fauconnier, Gilles & Mark Turner (2002) *The way we think: Conceptual blending and the Mind's hidden complexities*, Basic Books.
- 喜田 浩平 (2000) 「si と même の意味論的結合関係」『フランス語学研究』(日本フランス語学会) 第34号: 27-38.
- 大久保 朝憲 (2000) 「擬似同語反復文と擬似矛盾文」『文学論集』(関西大学) 第49巻4号: 23-40.
- Recanati, François (2004) *Literal meaning*, Cambridge: Cambridge University Press, 今井邦彦(訳)『ことばの意味とは何か—一字主義からコンテキスト主義へ』新曜社、2006.
- 坂原 茂 (1985) 『日常言語の推論』、東京大学出版会。
- 坂原 茂 (1992) 「トートロジーについて」『外国語科研究紀要』(東京大学教養学部) 40-2: 57-83.
- 坂原 茂 (2002) 「トートロジーとカテゴリ化のダイナミズム」大堀壽夫(編)『シリーズ』
- 酒井 智宏 (2005) 「マッチングと条件文・譲歩文の伝達情報」、日本フランス語フランス文学会 2005年度春季大会口頭発表、立教大学。
- Sakai, Tomohiro (2006) À propos de la valeur argumentative des conditionnelles : critique de la théorie de l'argumentation dans la langue, 『明星大学日本文化学部言語文化学科研究紀要』14: 127-139.
- 酒井 智宏 (2006) 「差異否定型トートロジー」、山梨正明 他(編)『認知言語学論考』第5号、ひつじ書房: 119-144.
- 酒井 智宏 (2007) 「マッチングと矛盾文の伝達情報」、『日本認知言語学会論文集』第7巻、日本認知言語学会: 427-437.

<Abstract>

Matching and Information Conveyed by Tautologies of the Type *X is X even if P*

Tomohiro SAKAI

(JSPS Research Fellow, Keio University)

The purpose of this paper is to show that the semantics of tautologies of the type *X is X even if P* can be calculated from the schemata of *X is X* and concessives.

X is X even if P conveys at least three types of meanings: (i) members of X that have property *P* should be treated as such, (ii) members of X that have property *P* do not need to have the opposite property $\neg P$, and (iii) the definition of the category X has nothing to do with *P* or $\neg P$. For example, (1) can convey the meanings shown in (2), where *Tama* refers to a particular cat that does not catch mice.

- (1) A cat is a cat even if it does not catch mice.
- (2)
 - a. Cats that do not catch mice also should be treated as cats.
 - b. Tama does not need to catch mice.
 - c. Cats should not be defined by their ability to catch mice.

The meanings in (2) can be derived from a space configuration subsumed both by the schema of concessives and by that of tautologies.

Concessives of the form *even if P, $\neg Q$* set up a counterfactual configuration where *if P, Q* holds and a factual configuration where *Q* fails to hold, the difference being due to the fact that the proposition set *E0* is valid only in the former (cf. Sakahara 1985). In the factual configuration, the proposition set *E*, which contains one or more propositions which are not valid in *E0*, prevents *P* from constituting a sufficient condition for *Q*.

Tautologies of the form *X is X* presuppose that in Space *M1* an individual *x* is an X and assert that in Space *M2* the counterpart of *x* is an X.

These two schemata can be unified into the schema of *X is X even if P*. Since *X is X even if P* is now a type of concessive and of tautology at the same time, it inherits the properties of both. This accounts for the three meanings mentioned above without any stipulation. (2a) can be obtained with two matching operations, based on the meaning of *X is X even if P* and some contextual assumptions. (2b) says that neither "Tama catches mice" nor "Tama does not catch mice" gives rise to a contradiction in the space configuration. (2c) is a proposition contained in the proposition set *E* which holds in the factual configuration.

This analysis is highly compatible with Contextualism as defended by Recanati (2004), in that it supports the view that pragmatic enrichment processes always come into play in the determination of the propositional content of sentences.